



聖人シリーズ（1）

カシアの聖リタ（1381-1457）記念日5月22日

2018年5月22日
S.リタ.T によるまとめ

聖リタは「望みなき者の保護者」「不可能を可能にする聖人」と言われています。

「リタ」は「マルガリタ」の愛称で、マルガリタ（マーガレット）とは日本語で「ひな菊」の事、ラテン語では真珠や宝石を意味する名前です。リタの年老いた母は、女の子が生まれることを天使によって教えられ、つけるべき名前も告げられたと言われています。

聖リタが有名になったことで、「マルガリタ」という名前とは別に、その愛称である「リタ」が独立した女性名としてポピュラーになったのだそうです。

1381年にイタリアのウンブリア州にあるロッカ・ポレナ村で生まれ、1457年にカシアで死を迎えました。

このロッカ・ポレナ村はアジジから南の方に40キロばかり行った山の中にあります。ロッカ・ポレナもカシアも、岩山が多く、でこぼこの地形でした。ロッカ・ポレナはカシアに続いているのですが、カシアから先は今も行き止まりになっているような辺鄙なところです。

リタは、1381年5月13日にカシアに連れて行かれて、そこで洗礼を受けたとされています。少女リタは、両親同様に読み書きは習いませんでしたが、毎日母親と一緒に教会に通い、祈りを覚えました。リタは天の御父の声を聞いていたと言います。そのため、彼女が一人で祈れるようにと、両親は屋根裏に祈りのコーナーを作っていました。

リタは日々、屋根裏の窓から見える岩山を眺めて祈りました。この窓は、天使がリタを訪れた「天使の窓」と呼ばれ、今も残っているということです。リタは、よく祈り、よく働きました。祈りや説教や聖画を通して、また同じウンブリアのアジジ出身の聖フランシスコらが伝えた「十字架上の苦しみのイエス」を彼女は熱烈に崇拝しました。

リタが結婚したのは14才の時のこと。両親は、リタがカシアの修道院に入ることを希望しているのを知っていたのですが、結婚が神のみ旨であると彼女を説き伏せて、縁談を進めました。夫になる相手はいろいろな仕事を手掛け（食料品卸業）、土地持ちの家庭出身のフェルディナンド・パウロという人でした。

神に仕えたい、というのがリタの望みでしたが、彼女は両親に従い、結婚して夫に仕えることになりました。

夫は、利権や縄張りを争い合う暴力グループの若頭のような存在で乱暴者だったのですが、リタの両親はそのことには気付いていませんでした。こうしてリタは、酒飲みで暴力的な夫に仕え、年老いた両親を支えなければならなくなりました。

リタは結婚して間もなく双子の男の子を授かりましたが、1402年の聖ヨセフの祝日には父を、お告げの日には母（90才）を相次いで失くしました。

リタは、夫の暴力に逆らわず、不当な言いがかりにも口答えせず、朝早くから夜遅くまで働き続け、子供たちに祈りを教え、教会に連れて行き、夫のために祈り、祈りに文句を付けられないよういっそう家事を完璧にこなしました。当時のイタリアでは、生まれた子供に洗礼を授けるのは普通の習慣でしたので、夫もカトリックの洗礼を受けていました。リタは夫の改心のために熱心に祈り、また、1日1食の半断食を犠牲として捧げていたと言います。

また夫のために、婚姻の秘蹟の恵みを神に乞い願ひ、その祈りが聞き入れられました。リタはこうして忍耐を学び、夫に対してどんな時に黙り、どんな時にどんなことを話してよいかも分かるようになりました。

子供たちへの配慮も忘れませんでした。この時代とこの地域に生きる男性たちにとって、「腕っ節が強いこと」が「男らしい」ことでしたので、子供たちが夫に倣って、夫のように成長して行くのを見るのが、彼女には一番辛い事でした。

しかし、ある日、変化が起こったのです。リタが20代終わり頃のことです。暴君だった夫が、突然リタに赦しを願ってきたのです。リタは「もちろん私はあなたを赦しています。赦すだけでなく、もう全てを忘れていきます」と答えました。

夫は、リタの限りない優しさと忍耐強さの影響を受けて、生来の怒りっぽさを自分で抑えようとするほど人が変わっていききました。息子たちも父親の粗暴さを受け継いでいたのですが、リタは優しさの中にも芯の強さを持ち、巧みに彼らを導いて行きました。

リタは、家庭に奉仕することが神のみ心であると修道生活を諦めはしましたが、霊的修練を行うことまでも諦めていたわけではありませんでした。また、彼女は他人の悩みを言葉で慰める才能を持っていて、リタの家は悩める人が大勢押しかける避難所でもありました。

ある朝の事、リタはカシアの教会に祈りに行こうと楽しみにしていたのですが、なぜか客を迎える準備をしなければならないように思えて、家にいることにしました。その客を待ちながら祈っていると、急に悲しい気持ちに襲われ、死苦に喘ぐ者のための祈りが口をついて出てきたのでした。そのような祈りをした自分に気づき、彼女は心底驚きました。

すると、戸口を叩く音がしました。リタは思わず、「主よ、憐れみたまえ。このお客様は苦い杯を運んで来ます」と囁きました。

その客とは、村の人たちで、中には隣家の住人もいました。彼らは、リタの夫が殺されたことを告げに来たのでした。犯人の行方はまだ不明だとのこと。せっかく良い人間になった夫がこんなに早く死んでしまったことを、リタは嘆き悲しみました。

ロッカ・ポレナの教会に残っている記録には、改心後の彼女の夫は、前のように剣を身に付けていなかったのに、暗殺者から身を守ることができずに惨殺された、とあります。

更に、リタを驚愕させたのは、この頃の風習で決闘を名誉あるものと考えていた息子たちが、復讐を誓っていることでした。

村中の男たちが山に潜んでいるとおぼしき犯人を追って、山狩りを始めました。山の中腹にある洞窟に身を潜めていた当の犯人は、探し出されるのは時間の問題だと怯えていました。

苦しみ、祈っていたリタは、その洞窟までやって来ました。天使の保護を祈りつつ、闇の中、明かりを手手に一人で行って来て犯人を見つけたのです。

「神さま、あなたの限りない慈愛を私にください」と祈りつつ、リタは震えながら犯人の肩に手を触れました。そして、「怖がらなくてもいいですよ」と、大きな声で繰り返し言いました。その声には威厳がありました。

犯人には、この人は自分が殺した人の妻だということが分かりました。そこでリタを殺そうと思ったのですが、どういうわけか身体が動かず、リタが自分に話し掛ける声を聞いていました。

ついに犯人はリタに説得され、後に着いて彼女の家に行き、そこで匿（かくま）われることになりました。リタは息子たちに用事を言い付けて、遠くに送り出していましたので、家にいるのはリタだけでした。

そこへ、隣家の人からリタを訪ねて来ました。ちょうどリタは緑の葉で環（リース）を作っているところでした。彼女は、「カシアの教会のマリア様のご像のために編んでいるのです」と彼に説明しました。

「何か願いごとがあるのですか？ 例えば旦那さんを殺したやつに正しい裁判が行われるようにとか？」という彼の問いに答えて、リタは「世俗の裁判を神さまに要求してはなりません」と答えました。

彼は村人を代表してリタの様子を伺いにやって来たのですが、リタの様子から犯人を匿っていることに気付き、言いました。

「あなたの旦那さんは神と人々のおきてに従って暮らしていたではありませんか。その旦那さんを殺した犯人を、あなたが匿うなんてこと、私は理解も納得もできない！」

リタは泣きはらした目で言いました。

「私は隣人愛の掟に従っただけです。悪事は悪事を生むだけです。神の御母はその御ひとり子を私たちが殺したにもかかわらず、全人類を庇護なさってくださいます。」

リタに匿われていた犯人は、自分の身に何が起こったことが依然として理解出来ませんでした。

彼はただ、あの婦人の言うがままに犬のように従って付いてきたのです。

リタは彼に、この村を出るように伝え、言いました。「村の男衆は私があなただけを引き取ったので復讐することをやめました。」

犯人は、「あなたは、私を見るのが辛いから私に去れと言うのでしょうか？ 旦那さんを殺した私を見るくらいなら、その目をえぐり取った方がマシなほど辛いのでしょうか？」と言いました。

リタは答えました。

「あなたの兄弟が罪を犯したとしたら、その人はもはやあなたの兄弟ではなくなるのですか？」

リタの好意は、この男には非常に気味悪く感じられました。

男は、「食べ物に毒が入っていればよいのに」と思ったほどですが、リタが用意した食事は大変美味しい物でした。

「入り用の物は何でも差し上げます。ら馬を用意してありますから、遠くに逃げなさい。」

男は「息子さんたちのためですか？」と言った。

「いいえ、私たち皆の靈魂の救いのためです。」

「私は何でもします」と男は食べる手を止めて言いました。

「でも、これだけは信じて下さい。奥さん、あなたの親切は私のナイフが旦那さんを殺した以上に私の心に深く突き刺さりました。

息子さんたちが、私を野獣を狩るように追い掛けて来るのをあなたは阻むことが出来なんでしょう。

私はあなたに助けられて、永遠の闇に拾い上げられるより、いっそ息子さんたちに捕まった方が気が楽だ思うようになりました。」

「私はいつもあなたのために祈っています。神さまがあなたをお赦しくくださいますようにと祈っています。」

リタは今度は息子たちの靈魂のことを考えました。血の復讐という目に見えぬ「おきて」が息子たちの心の底にこびり付いていて、リタの貧弱な言葉では、とても彼らの考えを変えることは出来ないと思われたのです。

自らが差し出す犠牲だけが役立つに違いないとは思いますが、すでに自分でできる犠牲は捧げ尽くしてしまいました。

修道生活への召し出し、辛い夫婦生活、そして夫が改心し、生活が順調になったと思われた矢先に夫ももぎ取られました。

「おお、神さま！ なんてことでしょう。私はまるで商売のようにあなたと値の付けっこをしています。あなたは御ひとり子を、私たちの罪の贖いのためにお渡しになった時、『私のもの』と『あなたのもの』とを計りにおかけになられませんでした。」

「主よ、私の息子たちを、彼らの魂の救いのために犠牲として捧げるならば、、、それは大それたことでしょうか？」

リタは不思議と心が高められ、慰められるように感じ、眼差しを十字架の方に向けると大きな声できっぱりと言いました。

「主よ、私の息子たちをお召してください。あなたのみ心のもとへ、あなたの栄光の中へ、息子たちが人殺しの仲間入りをする前に！」

それから1年も経たないうちに二人の息子は病気にかかり、犯人を赦し、終油の秘蹟（現在では「病者の塗油」を受けて、神の恵みのうちにこの世を去りました。

隣家の人にはリタを見て言いました。
「あの人は自分の夫を殺した人を助けた。まったく私たちの理解を超えている。今また息子さんたちを熱病で亡くされた！ あの人は神の怒りによって破滅させられたと人々は考えている。しかし、私には、神さまが聖性の甘味をもってあの人を祝福なさっておいでのように見える。」

こうしてリタはひとりぼっちになってしまいました。
その孤独の中で、神に向い、初めに抱いていた修道院に入る望みを実現したいと思い始めたのです。リタが30才の時のことでした。

そこで、カシアにある、幼い頃から知っていたアウグスチヌス会マリア・マダレーナ修道院の扉を叩くことになったのです。

一度目は告解司祭を通して修道志願を伝えてもらったのですが、あっさり断られました。修道院は未婚の女性しか受け付けない規則だという理由です。

たいていの試練は「神のみ旨」として甘受して来たリタでしたが、この拒絶は悪魔によるものかもしれないと感じました。
修道女になるようにと、これまで何度も天使や聖人の勧めを受けていたからです。
リタはいっそう祈り、苦行をしました。
天国へ至る門は狭いのです。修道院に入るのに悪魔の妨げがあるのも当然のことに思えたのでした。

二度目の志願は、正式な手順で行われました。
リタは修道院長の面接を受け、神に強く呼ばれていることを訴えました。
返事は長く待たされました。アウグスチヌス会はリタの評判、徳について調査していたのです。
リタの夫の殺害のもととなった係争に決着が付けられること、亡夫の親戚の同意を得ることなどを公証人の正式書類にして提出することを条件付けて来ました。
リタは出来ることは全てしたのですが、結局今回も断られることとなります。
アウグスチヌス会は規則を破るわけにはいかなかったのです。

しかし、リタはこの再度の拒絶によって、「修道女になる」という望みが一層強められ、三度目の志願を提出しました。最初の志願の時からすでに数年が過ぎていました。
アウグスチヌス会の修道院長は、リタの熱意に心を動かされていました。例外を認めるかどうか、長老会議にはかられたのですが、結局、三度目も志願は認められませんでした。

そこで、リタは自分の保護の聖人である洗礼者ヨハネ、聖アウグスチヌス、聖ニコラスに助けを願いました。

ある真夜中のことです。
リタを呼ぶ声が聞こえるので家の扉を開けてみると、そこには、その三人の聖人たちが立っていました。
三人に続くように促されたので、リタは彼らの後に付いて行きました。彼らはすべるように何キロのものを道を歩き、いつの間にかマリア・マダレーナ修道院の前に着いていました。

「きっと、この方たちが院長様に執りなしてくださるのだろう」とリタは思ったのですが、彼らは扉も開けずに門を通り抜け、修院の聖堂の中に入っていったのです。

驚いたことにリタ自身も同じようにして聖堂の中に入っていました。

「あなたの場合は、不可能なことが行われたのです。」と言って、三人は姿を消してしまいました。

その朝、シスターたちは聖堂の中で祈っているリタを見て大いに驚き、そして一部始終話を聞いて、リタを会に入れねばならないと感じました。1423年、リタが42歳となる年でした。

こうして、リタはようやく入会を許可されることになりました。
リタは見習い中、極めて謙遜で従順、朗らかで幸せそうで、院内の仕事を嬉しそうにこなすのでした。

リタは字が読めません。そのために、修道院の細かい規則を覚えるのに時間がかかりました。また、物忘れが多い上、度々失敗を繰り返しました。
修道院長は、そんなリタを修道女たちの前で叱咤したり赦しを請わせたりしました。それは、院長の配慮からでした。
奇跡的な入門を果たし、年輩ではあるがまだ見習い期間中の修練女に過ぎないリタに対して、畏敬の念を抱く若い修道女たちもいたので、それがリタの傲慢の種になることを心配したのでした。

修道院長の厳しい態度は修道女たちに反映し、皆がリタの欠点に目を光らせるようになりました。また、修道院に特別な入り方をしたリタを快く思っていない者たちもいました。

修道院長はリタに、庭の隅の壁際にある枯枝に毎朝毎晩水をやるように命じました。
それは古い葡萄の樹の枝で、完全に枯れてしまったものなのか、あるいは枯枝を土に挿しただけのものかどうか分からないのですが、どちらにせよ、水をやることが無駄なのは誰の目にも明らかでした。

修道院長はリタの従順を試すためにそれを命じたのです。
リタは、来る日も来る日も朝夕の水やりを誠実に果たしました。
それを見て、リタの単純さを冷やかす修道女もいましたが、リタの水やりは一年も続けました。修道院長はリタの従順と謙遜を認めざるを得ませんでした。

そして、ある日のこと、枯枝に芽が吹いたのです！
やがて、この葡萄の樹はたつぷりと葡萄の実を付けることになりました。

この葡萄の樹は、五百年を越す今も、カシアの修道院で見ることができるのだそうです。
修道院の中庭に入って直ぐ右手に見事な枝ぶりを見せています。
今日カシアやロカポレナで手に入れるのできる聖リタのメダイには、この葡萄の樹の屑を「聖遺物」として中に入れたものがあります。

1431年に教皇となったエウジェニオ四世は、当時西方諸国を荒らすトルコに対して、十字軍に加わって戦うようにとキリスト信者に勧めていました。

その十字軍の説教家の中にフランシスコ会員のヤコブ・デラ・マルカという修道者がいました。(彼は死後、列聖されました。)
彼は兵士として戦場に赴き、戦地から戻ってからは、イタリアの町々で福音を説く説教師として派遣されました。

「こういう危険な困難な事態が私たちの上に襲い掛かろうとしています」
「それは、私たちが宗教に対して不熱心でもあったからです。しかし、神はご自分に忠実な人たちをお守りくださるに違いありません。」

ある日リタは主のご受難について話すヤコブ修道士の説教を聞きました。
「キリストのおん苦しみが無駄になっているのを見るくらい悲しいことはありません！
多くの人がみ言葉を聞かないのです。思い出してください。聖パウロも人びとに向かって、主と共に苦しみ、主のみわざを助けよ、と勧めたではありませんか！」

「このカシアの町にも、たしかにこの言葉を受け入れる人がいるはずですよ。
少なくとも、主の茨の冠の、そのとげのひとつでも受けようと決心している人が！」

リタは、うなずきました。
「ああ、私を、その人にしてください！」と祈りました。

修道院に帰ってから、リタは十字架像の前に跪いて、ふたたびその願いを繰り返しました。

するとその時、キリストの十字架像の茨の冠から、一本の棘が、リタの額に突き刺さったように見えたのです。それ以来、リタは、この額の傷の痛みを苦しむこととなります。

リタの「聖痕」の噂は町中に広まりました。アウグスチヌス会の修道女のベールは黒ですが、額に当たる部分は白い頭巾のようなもので覆われていたために、聖痕は額とその白い布の両方を赤く染めていたからです。

リタはすでに60歳を超えていました。リタの聖痕は腫れ上がり、化膿して、異臭を放ちました。そこで独房に閉じこもる生活を強いられることとなります。

悪臭と激しい痛みの中で、独房で祈る生活が8年間続いた1450年の聖年のことです。69歳のリタは、ローマ巡礼の引率者に志願して巡礼を果たしています。

リタは神に祈り、巡礼中は聖痕を消して頂きました。しかし、巡礼から戻ると聖痕はまた現れ、ふたたび独房での生活が始まりました。

(それから550年後の、2000年の大聖年にリタは遺体となってもう一度ローマに戻って来ることとなります。ヘリコプターで移動し、サンピエトロ大聖堂の前で巡礼者の拝観の対象となります。)
教皇ヨハネ・パウロ二世は「ウンブリアの宝石」と呼ばれる聖女の前に跪き、祈りました。)

この巡礼中、リタはローマで数え切れないほどの貧者、浮浪者、病人を目にしました。ロカポレナやカシアでは想像出来ないような都市型の不幸の存在と、その深さを理解したのです。そして、余生を人びとのための贖罪に捧げようと決心します。

やがて、隔離されたリタの聖性の噂を聞きつけた人びとが、遠くから列をなしてやって来るようになりました。リタは人びとのために祈り、「奇跡」が相次いで起こりました。瀕死の娘を家に置いて修道院に駆け付けた母親が、リタに祈りを頼んだ後で家に戻ると回復した娘の姿を見て涙を流したこともありました。

リタが過ごして来た長い苦しい家庭生活、家庭に楽しい雰囲気を作るためにしたあらゆる努力、夫の不愉快な言動に耐え忍んだ年月は、リタに不和を収める方法を学ばせてくれました。

ですから、彼女の忠告に従えば、家庭内に必ず平安、幸福が戻ってくるのでした。また、リタの祈りによって、多くの人々が改心し、多くの病人が奇跡的に治ったという報告もあります。

リタはローマから帰って二年後、衰弱が激しくなり、ついに寝た切りとなりました。それから四年間は、床に就いたままで訪問客を迎えていました。

最後の年の一月のある日、故郷のロカポレナからやって来た女性に、リタは実家の庭に咲く薔薇の花を持ってきてくれるように頼みました。(イチジクの実も同時に欲しがったという説もあるようです。)

季節は冬。特に山の冬は厳しく、外は一面雪で覆われていました。女性はリタが病気で季節の感覚も失ったのだらうと思ったのですが、それでも、雪の山道を六キロも歩いてロカポレナに戻り、リタの庭を訪れました。すると、葉を落とした冬の薔薇の木の枝に、真っ赤な大輪の薔薇がひとつ咲いていたのです！(イチジクの木のカサにも二つのイチジクの実が寄り添うようになっていました。)

神のみ業を目にして歓喜に包まれたその女性は、薔薇を手折り、(イチジクをもちで前掛けに包むと)今戻って来たばかりの雪道をまたカシアへと引き返しました。リタは、神さまにわがまを聞き届けてもらったことを事のほか感謝したといえます。

このエピソードによって、薔薇はリタのシンボルとなり、この世の命を終えた5月22日には、今でも巡礼者たちが手に手に赤い薔薇を持って集う光景が見られます。ロカポレナのリタの実家の庭には薔薇園が作られ、病床にいるリタが薔薇に手を伸ばす像が飾られています。

その等身大の像には、赤ん坊や子供の写真、その他いろいろなものが貼られていたり、リボンやマフラーがくくり付けられています。それらは、リタに取りつぎを願って、子供が生まれ、子供の病気が治った人たちがお礼に置いて行くのです。

1457年5月22日、リタが息を引き取ったこの日、人びとは独房の上に強烈な光を見、修道院の鐘が天使によってひとりでのに鳴らされるのを聞きました。

死と同時に額の聖痕から発していた腐臭は絶え、芳香が部屋を満たしたのです。ひとりの修道女がリタに接吻すると、長い間麻痺していた手が突然動くようになりました。

修道女たちはリタの遺体を修道院内のチャペルに安置しようとしたのですが、知らせを聞き付けた人びとの願いで、町の教会で公開されることになりました。この時代、聖人の評判の高い遺体は、それを見たり触れたりするだけで奇跡を起こすと言われていたので、多くの人々がリタの遺体を見にやってきました。

リタの体は硬直を見せず生き生きとしていたので、彼らは蓋なしの展示用の棺を作ることにしました。それは糸杉材で普通の棺より浅く作られました。その棺の上に、たっぷりした紅い布を底に付かぬように広げ、ちょうどハンモックに寝かせるようにリタを寝かせたのです。リタの体は、まるで棺の表面から浮き上がるような形になりました。

そのような目立つ形で人目にさらされ、外気に触れ、奇跡を求める人びとから何度も触られたにもかかわらず、リタの遺体はよりいっそう輝き、芳香を放ち続けました。

腐敗を免れた聖リタの遺体は、カシアのSanta Ritaバジリカに今も眠っています。

聖リタ、「望みなきものの保護者」「不可能を可能にする聖人」よ、どうか私たちのために祈り、私たちを守り、導いてください。

あなたのように、キリストの後に従うものとなれますように。

S. リタ. T.

参考資料 「教会の聖人たち」上巻・ 「聖女の条件」